



三重県公立小中学校教頭会

〒514-0003 津市桜橋 2 丁目142

教育文化会館別館 3 階

TEL 059(228)2340

FAX 059(228)2271

E-mail : mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

第58回全国公立学校教頭会研究大会徳島大会

豊かな人間性と創造性を育む学校教育

郷土への誇りをもち 人との関わりを深め
たくましく生き抜く子どもの育成

全体シンポジウムに参加して

津市立八ッ山小学校 森 徹

阿波踊りの軽快なお囃子と踊りによる歓迎で始まった開会行事に引き続き、全体シンポジウムが開催されました。

シンポジウムのコーディネーターとして阪根健二氏（鳴門教育大学大学院教授）が、シンポジストとして浅田和伸氏（文科省大臣官房審議官）と高橋博義氏（神山町教育長）と松浦素子氏（本家松浦酒造場 代表取締役社長）が登壇し、「郷土への誇りをもち 人との関わりを深め たくましく生き抜く子どもの育成」をテーマに話し合われました。

教育関係者、会社経営者等それぞれの立場からの子どもの未来の姿を見据えた前向きな意見を聴くことができました。個人的にですが、次

のような意見が印象に残りました。特に企業経営者からの意見は、子どもの育成だけでなく教員の育成という視点でも参考になるものでした。

- ・"郷土への誇りをもち"ことの基本は自分自身を好きになることである。そして、"人との関わりを深める"ためには挨拶や会話・対話のコミュニケーションの力を伸ばさなければならない。また、人とうまく関わるには、人の気持ちを想像する力や我慢する心を鍛えることも大切である。そして"たくましく生き抜く"には、レジリエンス（逆境にも折れない心）を育まなければならない。
- ・子どもたちは20年、30年先の未来を生きる存在である。それを意識し、そこで生き抜く力

を育むのが私たちの仕事である。今のおとなの常識を押し付けてはいけない。

- 学校の現状や子どもたちにこんな力をつけるためにこんなことをしたいということを関係者に説明し、理解を求めていくことが必要である。また、学校と地域が連携し、子どものために協力する体制を築いていくことが大切である。
- "郷土の誇り"は、自分たちにとってあたりまえ過ぎることが多く気づきにくいものである。あたりまえであることの良さに気づかせていくことが大事である。

• 人間関係でトラブルが起きるのは、"事実"が"感情"に支配されてしまう時である。人との関わりを深めたくましく生き抜くには"事実"と"感情"を切り離して感情をコントロールできる力が必要である。

• 褒められて育っただけでは、社会人としてやっていけない。苦難をチャンスとしてどうしたら解決できるのかを考えられる心と力が必要である。

全体シンポジウムをはじめ本研究大会での学びや気づきは、教育実践の向上につながる有意義なものとなりました。

第1A分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

多気町立外城田小学校 丸 谷 実

第1A分科会は全体会会場の「アスティとくしま」の第1特別会議室で行われた。参加者は運営スタッフを含めると約190名近くで、会場はテーブルが入りきらず、提案・質疑応答の後、一部のグループは会場を移動して分散会を行い、また元に戻って発表・指導助言を聞くという形式で2本の提案発表がなされた。

1 地域連携及び学校間連携の推進による特色ある学校づくりへの教頭の関わり

～地域連携担当教職員（地域連携教員）の活用と小中一貫教育の推進を通して～

（栃木県佐野市小中学校教頭会）

佐野市では、中学校区の小中学校が、共通の育てたい児童生徒像を共有し、小中一貫教育を推進している。その小中一貫教育に係る様々な

取り組み実践が報告された。取り組みの成果として、小中の交流の中でお互いに責任を押しつけて合ってきたあやまちに気づいたこと、地域ボランティアの活用が図られ地域の教育力を活用した授業が行われるとともに教職員の資質が向上したことがあげられる。課題としては地域連携教員を中心とする実践にいたっている学校がまだまだ少なく、体制整備の充実が必要であること、地域連携教員の約半数を教頭が兼務しているという実態があげられた。

助言者から、小中一貫で学力向上が図られていくかどうかの検証と、できることできないことを明らかにする必要があること、教頭の仕事が増えるだけにならないようにコーディネーターがいるといった指摘がなされた。

2 町をあげて特色ある教育課程の編成に取り組む ～ALL四万十・三原～

(高知県四万十市・三原村教頭会)

四万十市および三原村では特色ある教育課程の実践交流とPDCAマネジメントサイクルの確立で教職員の意欲化を目指したところ、学力テストの結果が向上し、児童生徒の問題行動の発生率の低下も見られたとの報告がなされた。学校のビジョンを明確にし、全教職員に共有化され、取組の方向の具現化で成果を上げていることを評価する意見が多く出された。教職員のベクトルを揃えるということが教頭の一番の関

わりどころであると確認することができた。課題としては各分掌担当者の役割をさらに明文化し、自己目標との関連付けで学校経営の参画意識をさらに高めることなどがあげられた。

最後に助言者の北海道の校長先生から「鉛筆のような管理職に」というたとえがあった。まわりにキをつかい、シンが一本とおっている。身を削りながら人の役に立っている。「教頭の一言は大きいですよ、忙しいけれどもやりがいがありますよ。」との話に身の引き締まる思いがした。

第1B分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

伊勢市立城田小学校 森 浩 亨

研究大会2日目の分科会は、151名の参加者が25グループに分かれて、2本の提案レポートについて意見交換が行われた。

1本目は、「生きる力を育む教育課程の編成・実施・評価～創意工夫を生かした特色ある学校づくりを目指して～」と題した富山県富山市教頭会からの提案であった。



知・徳・体の3つの柱でアクションプランをたて、基礎的・基本的な知識及び技能の習得のための朝学習の時間（知）、図書ボランティアによる読み聞かせを行う時間（徳）、マラソン等を行う時間（体）のそれぞれに数値目標を設定して教育課程を工夫した実践が報告された。富山市内の学校は、どこでもこのアクションプランに取り組んでいるそうである。また、家庭・地域の連携では、教頭が仲介役となり、「元気な学校創造事業」を活用した芸術鑑賞、水泳やダンス教室等の取組が紹介された。

「知・体」の数値目標は立てやすいが、「徳」の数値目標は難しい。グループ討議では、学力向上も含めどのような数値目標を設定するか、意見交換がなされた。また、家庭・地域の連携



では、教育課程実施上の地域連携や調整について「ボランティアの活用、許可の手続き、安全対策の検討、費用の捻出等」活発な話し合いがなされた。

2 本目、午後からは「教育課程の編成、実施における教頭の関わり～学校統合による新中学校開校に向けた学校・家庭・地域の連携の実践を通して～」と題した徳島県小松島市立小松島南中学校の提案であった。

徳島県では地域の過疎化に伴う少子化問題に対応すべく学校の統廃合がすすんでいる。閉校となる坂野中学校と立江中学校の特色を生かした教育課程の編成をどうするか、準備委員会も含めると3年に渡る取組であった。日課、通学路、防災、行事等、討議する課題は数多くある。坂野中学校と立江中学校の教職員が、一つひとつ議論を重ねながら小松島南中学校の開校に向けて取り組んでいった過程が報告された。

この提案の後は、児童生徒数が減って統合がすすんでいる他県の状況がたくさん出された。都市部を除き、全国的に児童・生徒数減少による学校の統廃合がすすんでいるようで、他県の実情や、実際に統合し苦労したがやりがいがあったという体験談も聞くことができ、有意義な意見交換になった。学校統合という時期であるからこそ、教頭としてのリーダーシップが大切になってくることを改めて実感した。

第2分科会

「子どもの発達に関する課題」に参加して

松阪市立第四小学校 齋 藤 実

第2分科会は全国から集まった300名を超える副校長・教頭が42グループに分かれ、3本の提言をもとに熱心に討議が行われた。

1 本目の提言は、「自分を大切に 人を大切に ふるさと宝塚を大切にする人づくりに向けて」と題して、宝塚市小中特別支援学校教頭会より発表があった。全国学力・学習状況調査等から明らかになった「自尊感情が低い傾向にある。」という課題解決に向け、地域の教育力を

活用した、地域と一体となった取組を実践されていた。地域の教育力を活かし、子どもを育ん





でいくには、副校長・教頭のコーディネート力の大切さを改めて実感した。また、地域の様々な人との交流を通して地域とつながるとともに、子どもたちの自己有用感や自己肯定感を高めていくことになると感じた。

2本目の提言は、「未来に向け力強く生きる子どもの育成」と題して、高知市教頭会より発表があった。高知市では、小学校6年生から中学校1年生への移行段階で、不登校が大幅に増加する現状がある。その原因として、子どもたちの人間関係を形成する能力の低下が挙げられていた。子どもの人間関係をつくる力を育てるため、教職員の意欲や指導力を組織として向上させる必要がある。教頭として、校内指導体制の確立と教職員の指導力の向上にどのように関わっていくのかが話し合われた。討議を通して、「若手教職員の育成」「外部との連携」を進めていくうえでの管理職の力量が大切であ

ると感じた。

3本目の提言は、「自他の命を守りぬく力の育成に向けた取組における教頭の役割」と題して、鳴門市小学校教頭会より発表があった。鳴門市は、南海トラフ巨大地震の発生により大きな被害が予想されている。子どもが自らの命を守ることができるよう、知識・技能を身につけることが大切である。そのため、教科・領域の教育計画に災害や防災に関する内容を位置づけること、教職員の防災意識を高めていくこと等が出された。いっどこで地震に遭うかは予想できない。義務教育終了までを見通し、発達段階に応じて災害から自他の命を守りぬく力を育成していく必要性を痛感した。

議論された内容が、自分自身の課題と重なり、学ぶことの多い分科会となった。学んだことを、今後の学校運営に生かしていきたいと思う。



第3分科会

「教育環境整備に関する課題」と教頭の役割

尾鷲市立賀田小学校 東 真人

3本の提言があり、「学校運営協議会」「学校間及び地域社会との連携」「土曜授業」の推進

や教頭としての役割が報告された。

それを受けての班別協議や指導助言の中で、

心に残ったことは次の点である。

- 地域との連携・協働のために、既存の組織を整理する形で「学校運営協議会」を設立し、教頭が教育支援コーディネーターとともに事務局を務めている。
- 「コミュニティースクール」は、人口減や地域・家庭の教育力の低下等の社会の変化を背景として導入されている。キーワードは「持続可能性」「社会総がかり」「協働活動」である。
- 幼稚園、小学校、中学校が連携して、「地域の子どもにつけたい力」を協議し、共通の合い言葉（「思いを伝えよう」）を策定して各校・園の教育活動に位置づけている。
- 学習スキルや家庭学習等に小中が連携して取り組むことで、接続が円滑に行われている。
- 「キャリア教育共通題材一覧表」を作成し、各校・園の活動を系統的・計画的に進めるために役立てている。
- 「社会に開かれた教育課程」が進められようとしている。学校と地域がパートナーとして連携・協働し、学校を核とした地域づくりも視野に入れていくべきである。
- 「土曜授業」については、地域や家庭の実態に合わせて、目的を明確に持って進めることや、意図や成果を積極的に発信する必要がある。

- 「土曜授業」の他に、「土曜日の課外学習」「土曜学習」等がある。地域や企業との連携を深め、社会全体で子どもたちを育てていく仕組みを追求していきたい。
- 教頭には、新しい取組について、教職員に（デメリットも含めて）その意義を十分に理解させることが求められている。
- 教頭も含めた管理職には、必要に応じて既存の教育課程を見直す強い意志が必要であり、組織マネジメントがこれまで以上に求められる。
- 「最も強い者が生き残るのではない、最も賢い者が生き残るのでもない。唯一生き残るのは、変化する者である。」（ダーウィン）という言葉を念頭に置いた管理職のあり方を目指してほしい。

「所変われば品変わる」という通り、各地にはその地域・学校に特有の課題があることに気づかされることもあったが、むしろ「学校統廃合」「少子高齢化」等は全国的に共通のものであることに認識を新たにした。また、教頭としての役割も同様に、同じように悩み、奮闘している仲間が全国にたくさんいることを知り、たいへん力づけられた。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」参加報告

伊賀市立壬生野小学校 山本 久仁彦

本年度の第4分科会の提言テーマは、①「教職員の授業力向上における教頭の役割」～校内

研修の取組を通して～ ②「学校の組織力を高めるための教頭の役割」～学校内外の力を結集



して～ ③「教職員の育成及び学校組織の活性化を図るための副校長・教頭の関わり」～「教職員の育成・評価システム」の活用を通して～の3本の提言があった。

まず、1本目は沖縄県中城村立中城南小学校からの提言で、①学年の枠を超えて教科部会を構成し、教材解釈や教材作りの違い、学年の違いを通して授業作りの視点を互いに学びあう。②授業を振り返ること（授業リフレクション）。③ノート形式は、まとめの中で振り返りを意識させ、授業で工夫したこと、わかったこと等を自分の言葉で書かせ自己認知を高めさせ、言語活動の充実を図る等具体的な取組が発表された。また、教頭として、①授業設計や反省会への参加と授業記録の提供及び指導助言を行う。②教育関係機関との連携・調整を行う。③PDCAによる組織運営を行い、共通確認と全校体制で実践する等の取組が発表された。

2本目は、愛媛県久万高原町立畑野川小学校からの提言で、アンケートをとり、意識調査の結果をもとにして発表が行われた。教頭としてのかかわりとして ①校長との意思疎通と全校

での共通理解 ②日々の各主任との情報共有 ③企画委員会や職員会での情報交換 ④仕事ぶりの見守り ⑤お礼の言葉を忘れない ⑥地域とのつながりを大切にする等の取組が発表された。

3本目は、徳島市城東中学校からの提言で、①目標設定の段階で副校長・教頭と教職員が、目標と方策を共有することで、指導の視点がより明確になった。②各自の目標を全体で共有化・可視化したことで、教職員チームとしてもベクトルの向きを常に確かめながら進むことができた。③中間面談や目標管理シートの再配布は、自分の目標を再認識させる機会として有効であった等の取組が発表された。

助言者からは、①学力向上は、普段の授業が大切 ②授業の振り返りは、子どもはしているが教員はできているか ③今後は、チェンスクール（分散型小中一貫教育）やTV会議等が増えてくるであろう。そのときの対応は大丈夫か。最後に、現状の課題克服で精一杯になっているが、子どもの未来を見据えてもっと職場で語ってほしいと言われた。

どの県においても教頭という立場は、非常に多忙で厳しく、体調不良で入院している仲間もたくさんいる。どこかで希望を見だし、楽しく仕事ができる工夫を見いださなければと痛感した。



第5A分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して

志摩市立鵜方小学校 竹 内 靖

5 A分科会は徳島県庁に近いホテルを会場として行われ、参加者は約200名でした。

1 本目の提言は、北海道後志小中学校教頭会の「教職員の専門性を高めるための教頭の関与の在り方」と題するレポートでした。「職場内ツールとして、月ごとの学年・学級経営や各校務分掌における具体的な活動内容を明確にした『月別学校運営計画』の作成・活用を通して経営参画意識が高められた。また、小中連携教育の推進を通して教職員の資質向上が図られた」というものでした。

グループ討議は22グループ（7～8名）に分かれて行われ、私のグループは、北は青森から南は沖縄まで、いろいろな県から参加していました。1 本目の討議は、小中連携の話題を中心に進められました。教頭がミドルリーダーと連携して、小中連携に組織的に取り組むことが重要であることなどが話し合われました。地域によっては、小中連携教員が加配されており、その先生を核に授業や生徒指導において連携が強

化されている例もありました。

2 本目の提言は、香川県高松地区小中学校教頭会の「教職員の業務改善や意識改革における教頭の役割」と題するレポートでした。「会議運営の工夫により多忙感解消に努めることができた。若年教員とベテラン教員がバディを組むことでお互いの資質・能力の向上を図った」という内容でした。

2 本目のグループ討議では、業務改善や意識改革について交流しました。会議の時間短縮はすでに皆やっているが、それ以上にだらだらと仕事をする事への意識改革が必要であるという話が出ました。必要以上に長時間の教材研究や毎日の通信を自分に課すなどの働き方を見直し、いかに必要ないものをなくしていくか、教頭が果たす役割は大きいと話し合われました。それぞれの地域性がありますが、いろいろ情報交換ができ、有意義な時間を過ごすことができました。

第5B分科会

「教職員の育成に向けた教頭の取組」に参加して

四日市市立大矢知興譲小学校 西 村 園 子

第5 B分科会では、2 本の提言がありました。

1 本目は、「教職員の資質向上を図る教頭のあ

り方～授業力向上を目指したミドルリーダーへの関わり～」というテーマで宮城県本吉地区小・中学校教頭会から提言がありました。アンケートにより、ミドルリーダーと教頭とでは、他の教職員との関わりの面で意識の違いがあることを明らかにし、授業づくり活性化のために、

I ミドルリーダーと積極的に語り合おう

II ミドルリーダーの活躍の場を積極的に作ろう

III ミドルリーダー同士の連携に積極的に関わろう、と提言されました。また、その提言に基づいた具体的な取組とその成果と課題についても資料の提示がなされました。それを受け、グループ別に意見交流を行いました。討議では、学校の規模にかかわらず全国的に40代の教職員が少なく、年齢層の2極化が進み、ミドルリーダーを育てる難しさが出されました。しかし、次世代を担う若手の育成が急務であることから、ベテランの教職員を巻き込みながら、ミドルリーダーに期待する内容を明確にして仕事を任せていくことや、ミドルリーダーが若手層を指導する際には教頭としてバックアップをしていく必要性等について話し合われました。

2 本目は、「学校行事の企画・運営に主体的に取り組む教員の育成を目指して」というテーマで、徳島県名西郡中学校教頭会から提言がありました。土曜授業等の特色ある教育活動の企画立案・実施を教頭が関わりながら教職員に任せることで、個々の能力を高めていくことや各種課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する力量をつけさせていくという内容でした。成果としては、自分の仕事に責任を持ち、意欲的に取り組むようになった。教職員が地域に出向くことで、教職員に地域の中の学校という意識が高まった等が挙げられました。課題としては

一部の教職員の負担が増加することが出されました。これを受け、グループ討議では、土曜授業実施状況の情報交換、行事精選の仕方、若い教職員への協働意識の持たせ方等について意見交流が行われました。

助言者からは、「生きる力」を育む教育を進めるために、今、ミドルリーダーを育成することが教頭としての使命であること、年齢にとらわれず、意欲のある教職員をリーダーとしていくことが必要という話がありました。学校のキーパーソンに求められるパワーは、人間味で・専門性で・情報で人と物を動かすパワーである。自分が教諭だった時の意識を忘れず、ミドルリーダーにどのようなになってほしいのかを常に考えながら接し、育成していったほしいと示唆されました。

今回、この全国教頭会研究大会に参加させていただき、全国から来られた教頭先生方と意見交流ができました。各都道府県によって様々な違いはあるものの、子どもたちの健やかな成長を願い奮闘してみえる姿は皆同じで、改めて元気をいただきました。このような機会を与えていただいたことに感謝しております。



第6分科会

「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」に参加して

鈴鹿市立創徳中学校 百々 淳子

7月27日（水）から3日間、徳島県徳島市で開催された第58回の研究大会に参加させていただきました。「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」という大会主題のもと、1日目の全体シンポジウムを受けて、2日目は、第6分科会「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」に参加しました。

午前は、まず、全国公立学校教頭会の調査部長から、「全国公立学校教頭会の調査」についての結果報告がありました。副校長・教頭の勤務状況、メンタルヘルス、実際に費やす職務内容・費やしたい職務内容、疲労やストレスを感じる職務、職務への魅力・やりがい等についての調査結果を聞き、どの県でも同じような課題を抱えていることが分かりました。続いて、同調査副部長から、平成28年度文教政策及び予算措置・文教関係立法等の要請について解説していただき、これらを受け、参加者は6～8人のグループに分かれ討議を行いました。勤務環境については、事務職未配置校や教頭が学級担任を兼務している学校等の過酷な勤務実態がある地域、市内全小中学校の職員全員がICカードを持ち勤務時間のチェックをしているという先進的な地域など様々でした。どこの学校でも共通の課題である過重労働に対する取組については、「〇〇は教頭の仕事」というような業務の固定化意識の改善が必要であるとの意見が出されました。

午後は、文部科学省初等中等教育局の黄地（おうち）企画官から、「教育行財政改革に係る今後の方向性」という演題で、学校現場における業務の適正化に向けた改善方策、児童・生徒への支援、小中一貫教育等、10のテーマについて国の動向や施策についてご講演いただきました。この後、再びグループに分かれ、不登校対策に係る小中が連携した取組、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた学力定着に係る取組、若手教員やミドルリーダーの育成等についての情報交換を行いました。課題山積の中、今後多くの管理職の退職が予想されます。管理職のなり手不足の現状では、我々自身が魅力ある教頭として勤務することが人材確保に繋がるということ全員で確認しました。今回の大会参加で、全国各地の教頭先生と意見交流でき、多くのことを学ぶことができました。貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。



特 I 分 科 会

「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」～生き抜く力・絆づくり～

菰野町立八風中学校 大立目 佳 久

「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」を大会主題とした第58回全国公立学校教頭会研究大会徳島大会に3日間の日程で参加させて頂き、大会2日目は、次期学習指導要領で話題の"アクティブ・ラーニング"をキーワードとした特別分科会Iで研修させて頂きました。

午前中の講義では、「子どもも教師もアクティブ・ラーニング」と題し、これまでの流れや次期学習指導要領の改訂の方向性、教室と学校の現実、求められる教員の資質とOJTによる資質向上の取組（教員のためのアクティブ・ラーニング）等について知見を拡げることができました。講義のまとめとして、教員のアクティブ・ラーニングの支援者（「職員室の担任」）としての副校長・教頭の役割として、同僚性の構築と教職員全員がリーダーシップを発揮できるための社会的・感情的な土壌づくりが重要であることを示唆頂きました。イメージとしては、植物が育つように手を貸すこと、すなわち「地面を耕し（学びあう土壌づくり）、十分な栄養がいきわたるように気を配り、水をやり（活動の意義付け・認める）、適当な時間陽に当て（褒める・感謝する）、害虫や雑草から守ってやる（業務改善・責任）こと」であるという言葉が印象に残りました。

午後の演習では、参加者6～7人程度による小グループで、「学校を学習する組織へと向かわせる副校長・教頭の役割」について、情報交

換や各校の取組について熱心な議論が繰り広げられました。また、他のグループからも、新しい手法を用いた取組、生徒の学びの質を高め深化させるための具体的な方策について、様々な提言が報告されました。

中身の濃い内容でしたが、夕刻からの徳島市内散策もでき、タイムリーな内容をしっかり学べたことで、「子どもも教師もアクティブ・ラーニング」という掛け声にむやみに翻弄されず、自信を持って取り組めるように学び、教職員育成に日々心を砕いている全国の仲間の経験と知恵を交換し、学びあい、元気になる機会にしたという趣旨の通り、今後の学校教育活動に対し、少し元気になる機会を頂き、深く感謝しています。



特Ⅱ分科会

「できる方法を考えて実行に移す」自分でありたい

桑名市立星見ヶ丘小学校 古 川 千登世

徳島教育会館に220名が集結した特別分科会Ⅱは、2つの課題をテーマに進められた。

午前のテーマは地域連携。「地域に誇りを持ち、想像力豊かな子どもを育てる」という演題のもと、NPO法人グリーンバレー理事長の大南信也氏の講演を聴いて演習を行った。

過疎化地域が生き残るための解決策を見だし、グローバルな視点での地域活性化を図った大南氏の取組は、学校現場と重なることが多く大変参考になった。特に心に残った言葉は、「できない理由よりできる方法を考えて実行に移す」「アイデアキラーをつぶす」だ。アイデアキラーとは、過去の失敗を例に挙げながら、新しい考えや意見を破壊する人のこと。提案された新しいアイデアに対して、前例がないことを理由に、難しい・無理だ・できるわけがない・誰が責任を取るんだ・・・万が一、失敗しようものなら“俺は聞いてない”。

現在の勤務校で4ヶ月が過ぎ、自分自身がアイデアキラーになっていないか、職員室の先生方や少数職種の方が意見を言いやすい雰囲気を自分は創り出すことができているか、と考えさせられた。また、グループ演習においては、学校と地域が連携していく以前の問題として、自分たちが“チーム学校”としてがっちりスクラムを組む大切さに気付かされた。

午後のテーマは業務改善。業務改善推進のサブテーマである“子どもと向き合う時間の確保

のために”を軸に、その改善策について、講師の木村直人氏からいくつかの提言があった。

「子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」という説があるほど、変化が激しく予測困難な未来が待ち構えているという。そうした未来に対応できる子どもたちを育てていくためには、教員が一番力を入れて取り組みたい“授業”の充実が急務。そのためには、「子どもに関わることはすべて教員」という文化を見直し、多様な専門性を備えたスタッフによるチーム体制への転換を図ることが重要だという。

グループ演習において、「確かにそうだけど、なかなか業務改善は難しいですね。」と発言している自分が、できない理由を掲げ、アイデアキラーになってしまっていることにはっとした。「できる方法を考えて実行に移す」自分でありたいと、強く感じて会場を後にした。



旅と写真

名張市立名張中学校 吉川 英 毅

昔のアルバムをめくるとその当時のことが思い出され、その時々を懐かしめる時間が僕にとっては楽しみでもあり、ホッとするときです。1つのスナップ写真からでも、結構当時のことを覚えているものです。十数年ほど前からは、フィルムからデジタルカメラに変わったので、パソコンがアルバム代わりになっていますが……。



僕は車での旅が好きで、大学生の時には、友達と三重県から車で、北海道や九州へだいたい10日間ほどの旅をし、知らない街で景色や人を写真に撮るのが楽しみの1つでした。車で寝泊まりするのも楽しかったです。函館の朝市でトウモロコシを勧めてくれたおばあちゃんの笑顔、山が煙を吐いている！！初めて見た煙を吐く桜島など、今も鮮明に心に残っています。

就職してからは、生徒たちのすてきな笑顔などいい表情を撮ることに燃えました。そして生徒たちに自慢していました。

子どもが生まれてからは、毎日のように子ども

の写真を取りました。パソコンに年間で3～4000枚が貯まっていきました。親ばかりですね。

双子の娘が祇園で舞妓体験をしたとき、何と『科捜研の女』などいろんなサスペンスに登場するあの有名な巽橋で撮影できたのが感動的でした。

40代後半になり、少し運動不足を感じるようになりました。そこで、自転車を始めました。これが結構面白くて、だんだん距離を伸ばし、今度は車ではなく、自転車で知らない町を走ってみたいとなりました。そして昨年、息子と2人での『しまなみ街道－自転車での旅』が実現しました。あらかじめグーグルの地図で、アップダウンの少ない島をパソコン上で走ってみてから行っただけですが、それでもいっぱい汗をかき、いっぱい水分をとりながら、もちろんカメラも持参で、約60km走りました。いい思い出がまた1つできました。

これからももっといろいろな街を旅し、写真を増やしていこうと思います。



郡市だより

『わが町の土曜授業』

東員町立東員第二中学校 下 村 雅 威

平成26年度に、桑員4市町で構成した桑員地区「土曜授業」検討委員会において、「土曜授業」について話し合いを重ね、各月の第4土曜日の午前を基本とし、月1回程度の実施を決定した。それを受けて東員町では、「学力の定着」「豊かな人間性の育成」「開かれた学校づくり」を目的に、平成27年4月より「土曜授業」の取組を進めている。下の2点が、位置付け・取組である。

□学校の教育活動として位置付ける

□各校の特色や独自性を生かした取組

東員第二中学校でも、今年度8回の「土曜授業」を計画し実施している。

4月…午前中は通常授業、午後授業参観と1、2学年は懇談会、3学年は進路説明会

5月…部活動参観

6・1月…通常の授業

9月…体育祭

10月…授業参観（3学年は進路説明を含む）

11月…期末テスト（3日目）

2月…生徒の希望による補充学習・発展学習。

町内においても、土曜授業日の教育課程編成上の運用については各学校の裁量が認められており、様々な取組が行われている。

本格実施が始まり2年目を迎え、見えてきた成果と課題。

成果としては、◇平日に行っていた取組を土曜授業日に設けたことで、保護者の参加が増え、好評を得た。◇生み出された授業時数を学力補充に充てることで、生徒や保護者から「賛成」「継続してほしい」という意見が聞かれ、一定の評価を得ている等。

課題としては、◆町内で統一された土曜授業日に学校行事が実施されることが多く、保育園幼稚園・小学校・中学校に兄妹がいる場合いずれかの参観になってしまう。◆学校外のスポーツクラブに所属している生徒は、大会等の日程の関係で学校を欠席することもあり、配慮が必要。◆教職員の負担感があり、振替が思うようにとれない等。

このような状況の中、「土曜授業」導入の趣旨に照らして生徒にとってより充実した取組にしていくことが、現場の管理職として求められる役割である。

ちなみに、東員町としては、安心して働ける職場環境作りへの配慮として、「土曜授業」実施に伴い、長期休業中に町内で統一した学校閉鎖日を設定する取組が実施されている。

